

山楯3・4・5遺跡

発掘調査報告書

国営農地開発事業鳥海南麓地区(4)

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1995-1168-01

1994

1995
1168
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

やまだて
山楯 3・4・5 遺跡
発掘調査報告書

国営農地開発事業鳥海南麓地区（4）



1995-1166

平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



山柄 3・4 遺跡俯瞰（南から）

付録
X.
A4
◎



S Q 1 窯跡（西から）



S Q 1 窯跡内部（北西から）

山柄 5 遺跡

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山柄 3 遺跡、山柄 4 遺跡、山柄 5 遺跡の調査成果をまとめたものです。

遺跡は山形県の北部に位置する飽海郡平田町にあります。平田町は庄内平野の東部に位置し、恵まれた森林資源をもとに山地では製材業が営まれてはるか、畜産も盛んにおこなわれています。

三遺跡のうち山柄 5 遺跡では、須恵器の窯跡が検出されました。これは 3 年次にわたり山海地区で調査された窯跡群よりも古い奈良時代に生産されたものと考えられます。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成 5 年 4 月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は国営農地開発事業鳥海南麓地区にかかる「山樋3遺跡」、「山樋4遺跡」、「山樋5遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日

■遺跡名 山樋3遺跡（AHTYD 3） 遺跡番号 平成2年度登録

所在地 山形県鶴岡市平田町大字山樋

現地調査 平成5年5月11日～平成5年7月28日 46日間

■遺跡名 山樋4遺跡（AHTYD 4） 遺跡番号 平成2年度登録

所在地 山形県鶴岡市平田町大字山樋

現地調査 平成5年7月5日～10月14日 49日間

■遺跡名 山樋5遺跡（AHTYD 5） 遺跡番号 平成2年度登録

所在地 山形県鶴岡市平田町大字山樋

現地調査 平成5年10月25日～11月30日 21日間

調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査担当

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 佐藤庄一

調査研究員 安部 実、斎藤 守

嘱託職員 長南憲一

資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治

主任調査研究員 佐藤庄一

調査研究員 安部 実

嘱託職員 長南憲一

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、東北農政局鳥海南麓開拓建設事業所、平田町農林課、平田町教育委員会、山形県農林水産部農地建設課、庄内支庁経済部国営土地改良対策室、山形県教育庁文化課の協力を得ました。ここに記して感謝申し上げます。

5 本書の作成は安部 実、長南憲一が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 出土遺物、調査記録については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。
SD：溝跡 SK：土坑 ST：住居跡 SQ：窓跡、焼壁土坑
- 2 遺構に付した番号は、現地調査での番号を報告書でも踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 地区割り（グリッド）の南北線は真北方向である。
 - (2) 遺構実測図等の方位記号は真北を示している。
 - (3) 遺構実測図は1/40, 1/60, 1/80, 1/600の縮尺で採録し、各揮団ごとにスケールを付した。
 - (4) 土層觀察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構の埋土等については算用数字を付して区別した。「色調」の記載については、1987年版の農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。
 - (5) 遺物番号は各遺跡ごとに1番から付した。なお番号は実測図・図版ともに共通のものである。
 - (6) 遺物実測図・拓影図は1/2, 1/3, 1/4縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
 - (7) 拓影図の断面の右側拓本は器表面で、左側拓本は裏面である。
 - (8) 土器実測図・拓影図の断面が“黒塗り”的ものは須恵器を表している。

目 次

第1章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の概要	1
第2章 遺跡の立地と環境	5
第3章 山柄3遺跡	5
1 概要	6
2 遺構	6
3 遺物	6
第4章 山柄4遺跡	13
1 概要	13
2 遺構	13
3 遺物	13

挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区概要	3
山柄3遺跡	
第3図 A区遺構配置図	7
第4図 S Q 1 窯跡 SK 9・10	
・20土坑	8
第5図 S Q 4・S K 8土坑	9
第6図 遺物1)	10
第7図 遺物2)	11
第8図 遺物集計グラフ	11
第9図 遺物分布図	12
山柄4遺跡	
第10図 遺構配置図	14
第11図 S K 1 墓設遺構	
S Q 2・5土坑	15
第12図 遺物	16
第13図 遺物集計グラフ	17
第14図 遺物分布図	18

第5章 山柄5遺跡	
1 概要	19
2 遺構	19
3 遺物	19
第6章 調査のまとめ	
1 山柄3遺跡	31
2 山柄4遺跡	31
3 山柄5遺跡	31
報告書抄録	32

表

山柄3遺跡	
表1 遺物集計表	11
山柄4遺跡	
表2 遺物集計表	17
山柄5遺跡	
表3 S Q 1内遺物点数表	29
表4 S Qステ場遺物重量分布表	29

図 版

巻頭図版 山柄3・4遺跡俯瞰
巻頭図版 山柄5遺跡
S Q 1窯跡、S Q 1窯体内
山柄3遺跡
図版1 山柄3遺跡
図版2 S T12住居跡
S K 8土坑
S Q 1窯跡
図版3 B区調査状況
B区精査後状況
S Q 4土坑
S K 8土坑
S Q 4周辺調査状況
S T12住居跡
S K 9土坑
S K 10土坑
図版4 S Q 1窯跡拔出状況
S Q 1窯跡側面
S Q 1窯跡部
S Q 1窯内
S Q 1窯底割り状況
S Q 1窯底側面
S Q 1窯底堆積状況
S K 5土坑遺物出土状況
S Q 1C-C'土層堆積状況
図版5 調査区全景
S Q 1窯跡
S Q 1窯体内遺物出土状況
図版6 遺物
図版7 遺物
山柄4遺跡
図版8 山柄4遺跡俯瞰
遺跡近景
図版9 S K 1埋設遺構
S K 1底面石
図版10 遺物
図版11 遺物
山柄5遺跡
図版12 山柄5遺跡俯瞰
調査区近景
S Q 1窯跡検出状況
S Q 2炭窯跡
調査区
S Q 1窯底断面
S Q 1窯壁側面
S Q 1B-B'土層堆積状況
S K 5土坑遺物出土状況
S Q 1C-C'土層堆積状況
図版13 調査区全景
S Q 1窯跡
S Q 1窯体内遺物出土状況
図版14 遺物
図版15 遺物
図版16 遺物
図版17 遺物
図版18 遺物

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経過

庄内地方の畑作農業の振興を図るため、昭和59年（1984年）に国営農地開発事業が計画された。国営農地開発事業鳥海南麓地区がおこなわれるにあたり、昭和60年度から山形県教育委員会で遺跡の詳細分布調査^{*1}をおこなってきた。山楯3・4・5遺跡はこれらの調査で平成2年度に発見され遺跡として登録された^{*2}。さらに本遺跡が事業区内にかかることとなったため、県教育委員会と関係機関との調整を経て、山形県埋蔵文化財センターが平成5年度に緊急発掘調査をおこなうことになった。

なお山楯3遺跡では、調査に入る前、立木伐採後の平成4年（1992年）秋に誤って重機械を使用した表土の土取りがおこなわれた。このため遺構の一部は結果としては残ったが、遺物の大半は消失してしまったと考えられる。

県教育委員会の同事業にかかる遺跡詳細分布調査では、山楯3・4・5遺跡をはじめ事業区にあたる出羽丘陵の山間部で遺跡の発見が相次いでいる。さらに平成2年度からは県教育委員会により山谷新田遺跡、山海窯跡群、山楯遺跡、山楯7・8遺跡、金俣I・K遺跡^{*3}が発掘調査されてきた。

2 調査の概要

山楯3遺跡は5月11日から調査を開始した。初日には関係する機関参集のうえ、調査の成功と安全を願う歓入れ式をおこなった。A区は表土の土取りによる土砂が山積していた。これを表土が残っている部分も含めてパワーショベルで除去した。B区は人力で表土からの掘り下げをした。A区では深く掘削された場所を除いて、表土除去後の面精査で焼土や柱跡などの遺構を検出できた。北側の斜面では窯跡の存在が予測されたとおり、登窯が検出された。7月28日の調査説明会では雨天にも関わらず約50名の参加を得た。

山楯4遺跡は7月5日から山楯3遺跡と並行して調査を開始した。平田町による立木の伐採後、パワーショベルで枝の撤去と表土の除去をした。後に人力で面精査をおこなっていった。遺物の出土量は少なかったが、丘陵平坦部で土器と剣片がまとまって検出された。

山楯5遺跡は当初、調査区内の伐採木搬出が北側水田の稻刈り後でないと不可能と見られていたが、山中からの搬出が可能となった。しかし伐採と搬出への対応が遅れたため、調査は工期をずらして10月25日から開始することとなった。伐採後の枝の撤去、表土の除去はすべて人力によりおこなった。11月25日の調査説明会では雪にも関わらず約25名の参加を得た。パワーショベルを使い埋め戻しをおこない、11月30日にはすべての調査を無事終了し器材の撤収をおこなった。

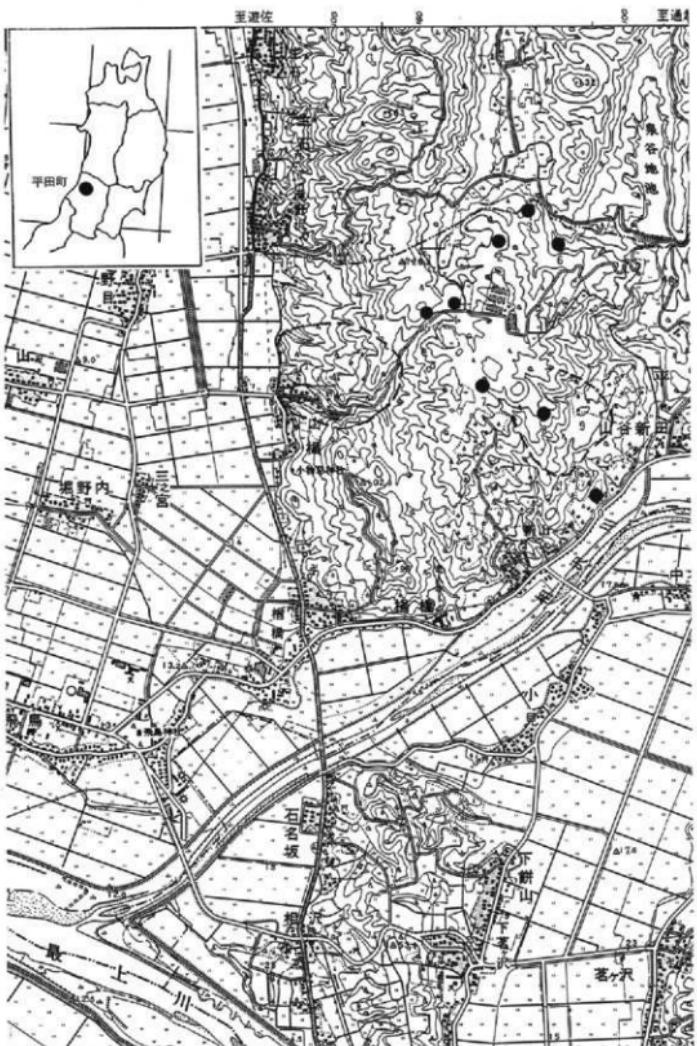
*1 「分布調査報告書（13）」、第96集、山形県教育委員会、1985年。

*2 「分布調査報告書（18）」、第163集、山形県教育委員会、1991年。山楯2～8遺跡を発見する。

*3 「山谷新田遺跡山海窯跡発掘調査報告書」、第170集、山形県教育委員会、1990年。

「山海窯跡群第2次山楯7・8遺跡山楯5遺跡発掘調査報告書」、第172集、山形県教育委員会、1991年。

「金俣I・K遺跡山海窯跡群第3次発掘調査報告書」、第183集、山形県教育委員会、1992年。



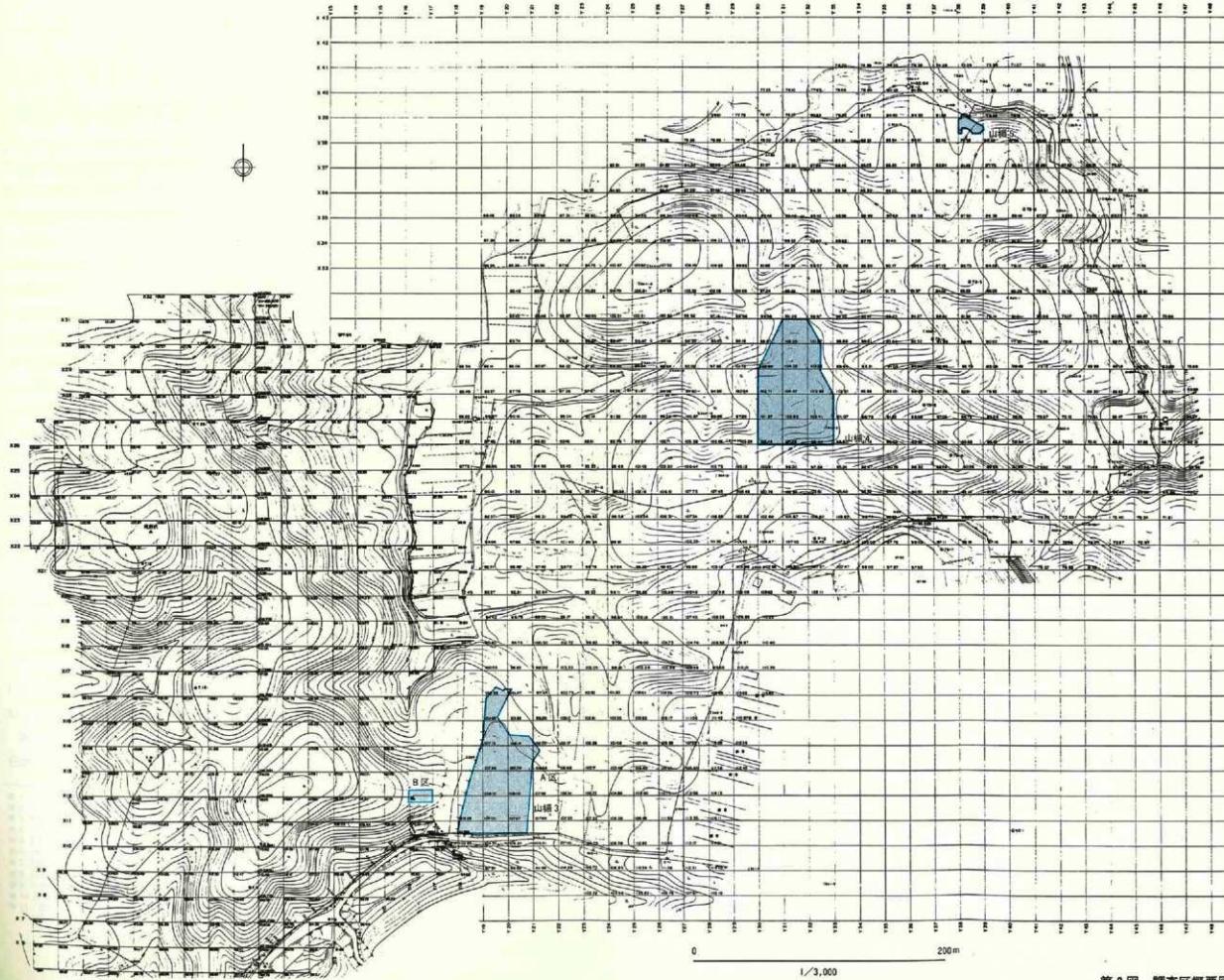
- 1 山柄3遺跡(5年度調査)
- 2 山柄4遺跡(5年度調査)
- 3 山柄5遺跡(5年度調査)
- 4 山柄6遺跡(3年度調査)
- 5 山柄2遺跡
- 6 山柄6遺跡
- 7 山柄7遺跡(3年度調査)
- 8 山柄8遺跡(3年度調査)
- 9 山柄9遺跡群(2~4年度調査)
- 10 山谷新田遺跡(2年度調査)

第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



標識路(3年度調査)
橋8遺跡(3年度調査)

図 (1/25,000)



第2図 調査区概要図

第2章 遺跡の立地と環境

遺跡は庄内平野の北東部、飽海郡平田町の山橋地区にある。山橋3・4遺跡は山橋集落東側の山中にあり、標高は約104mである。山橋5遺跡は山橋4遺跡の北約250mの平地と接する谷間に位置し、標高は80mである。各遺跡及び周辺の地目は杉林と雑木林である。

庄内平野は出羽丘陵の西に展開する海岸平野である。県内最大の平坦地で、東は出羽丘陵に接し、西は日本海に面して直線的な海岸線に沿った砂丘帯が発達している。平野部は実り豊かな穀倉地帯である。北には根野の発達した鳥海山（標高2,230m）がある。中央には県内を貫流する最上川が広い氾濫源を形成しながら、諸川と合流して日本海へと注いでいる。西縁の庄内砂丘は、北端が吹浦川河口から南端は湯野浜付近まで約35kmに渡る。南北約50km、東西約6～16km、北部で狭く南部で広く、標高は中央部で約64mである。日本の砂丘の中でも最高度に属し、基盤岩の無いところで60mを超すのはまれである。庄内は海洋性の気候で一日の気温の変化が少ない。しかし冬季間には暴風（地吹雪）の日数が多くなる。春から夏にかけては東風が卓越しやすく、この時期は高温・乾燥および好天に恵まれる日が多くなる。これが庄内の稻作の安全性につながっているといいます。

最上川と日向川に挟まれた平野部で約50カ所ほどの遺跡が確認されている。平田町には高阿弥田遺跡^①（昭和59年度調査、平安時代）や桜林興野遺跡^②（昭和61年度調査、平安時代）がある。また郡山・飛鳥など古代に由緒がたどれる地名が残っている。

本遺跡の北西には国指定史跡城輪廻跡^③がある。昭和6年に発見され、後年の調査で平安期の“出羽國府跡”と考えられている。築地で囲まれた一辺720m方形の外郭部と、120m方形の内郭部がある。内郭部は正殿・東西廄殿他の主要殿舎が整然と配置され、3期（9世紀前半～11世紀）にわたる変遷が考えられている。1期と2期の間には150年ほどの隙間があり、東方約3kmにある八幡町八森遺跡^④を「三代実録」（仁和3年五月廿日条「旧府近開高藏之地」）にある「遷府」とする考えがある。なお、城輪廻跡創建以前の所産と考えられる遺物が出土する遺跡には、酒田市手藏田遺跡群^⑤・生石2遺跡^⑥、八幡町甲田^⑦・沼田遺跡^⑧などがある。

山橋地区には山橋1遺跡をはじめ、鐵紋時代から平安時代までの遺跡が8カ所ほど確認されている。山谷地区的山海窯跡群では3次にわたる調査で9世紀後半から10世紀初頭に須恵器を焼成した登窯14基、多数の焼壁土坑、粘土採掘坑が検出されている。

酒田東部丘陵地帯には新山・山谷窯跡群^⑨、泉谷地窯跡群^⑩、順瀬山窯跡群^⑪、大平窯跡群の所在が考えられてきた。これらは古代における国家施設等へ須恵器を供給した官窯と推定されている。

① 「高阿弥田遺跡発掘調査報告書」、第86号、山形県教育委員会、1985年。

② 「桜林興野遺跡発掘調査報告書」、第115号、山形県教育委員会、1987年。

③ 「史跡城輪廻跡－昭和59年度調査概要－」、酒田市教育委員会、1985年。

④ 「八森遺跡－第1～14次発掘調査報告書－」、第4集、八幡町教育委員会、1993年。

⑤ 「手藏田遺跡発掘調査報告書」、手藏田2・12遺跡、第87号、山形県教育委員会、1985年。

⑥ 「生石2遺跡発掘調査報告書」、第117号、山形県教育委員会、1987年。

⑦ 「酒田遺跡第2次発掘調査報告書」、第77号、山形県教育委員会、1984年。

⑧ 「沼田遺跡発掘調査報告書」、第78号、山形県教育委員会、1984年。

⑨ 山海窯跡群はこの範囲ととらえられる。

⑩ 山橋5遺跡の窯跡は泉谷地窯跡群の範囲ととらえられる。

⑪ 「酒田市順瀬山第1号古窯址の調査概要」、「庄内考古学」第1号、川崎利夫、1966年。

「酒田市順瀬山第4号古窯址」、「山形史料研究」第7号、佐藤徳宏・佐藤潤子、1971年。

「酒田市順瀬山1号常窯の須恵器」、「あべい」第3巻第2号、川崎利夫、1979年。

第3章 山櫛3遺跡

1 概要

遺跡は山櫛標跡の主郭部の丁度東側、谷沿いの山中にある。北側に鳥海山が望まれる。調査区はA区4,237平方mと道路を挟んだB区100平方mの2地区で計4,373平方mを設けた。標高は平坦部で108mを測る。調査区中央の平坦部では縄紋時代の住居跡と考えられる柱穴と地床炉が検出され、縄紋土器と剣などもこの周辺からまとめて出土した。また縄辺の斜面では平安時代の窯跡と土坑が検出された。

2 遺構

■住居跡 S-T12住居跡はE-L 6地床炉を取りまくように、径5mほどの範囲で柱穴群が検出された。床面での検出のため堅穴住居跡であったかは不明である。このほかにE-L 7, 13, 17の3ヵ所で焼土が検出された。住居跡は焼土(地床炉)と縄紋土器の検出状況から、4軒ほどあったのではないかと考えられる。

■SK 8土坑 調査区北東の斜面に平行して掘られている。南側にS-T12がある。平面は東西に長い楕円形で、長径2.8m、短径2.5m、深さ0.5m。底に向かっての掘り込み方は緩やかである。石臼と鍔状石器が各1点出土している。

■S-Q1窯跡 調査区の北端の斜面で検出された、半地下式の登窯です。前庭部以降は土取りのため掘削され消失している。水平検出長6.4m、斜面縦横検出長6.5m、焼成部の幅1.5m、焼成部検出高40cm、焼成部傾斜角23度。縦道及び燃焼部と焚き口は赤く焼け硬い焼土となっている。加構されていた天井部の窯壁は窯体内の埋め土では検出されていない。前庭部の掘り込みから焼土の塊(窯壁)として炭と一緒に出土している。焼成部には炭が整然と並べられた状況で検出された。これは窯として使用した後に、天井部を前庭部に掻き出し、次に野天で何らかの焼成行為が行われたものと考えられる。前庭部から赤燒土器壺(第7図19, 20)及び碎片が少量出土している。平安時代の所産と考えられる。

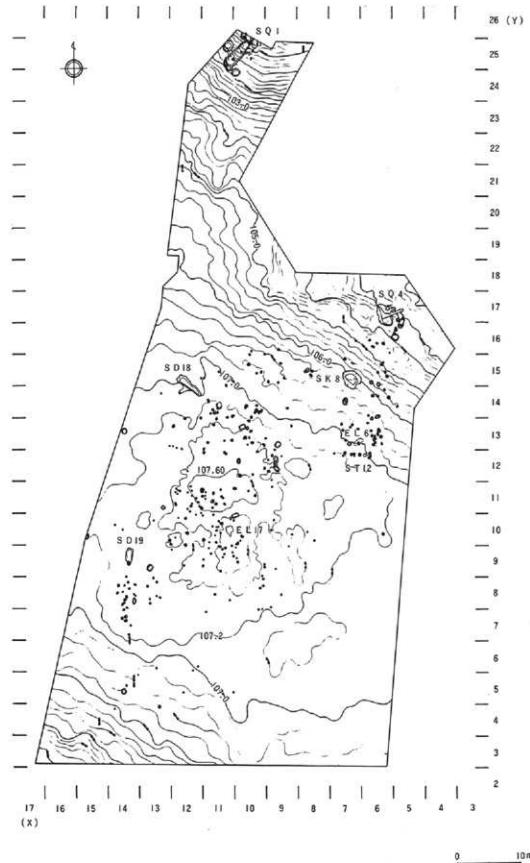
■S-Q4土坑 SK 8のさらに北側の斜面にある。北側壁が土取りのため掘削を受け消失している。平面が南北に長い矩形で幅1.8m、長さは検出長で3.5m、深さ0.5m。西壁と底面は焼土となっている。この上に厚さ8cmほどの炭が堆積していた。底面には2条の幅20cmほどの浅い掘り込みの溝が、長辺方向に沿って66cmの間隔である。土器などの遺物出土はない。

3 遺物

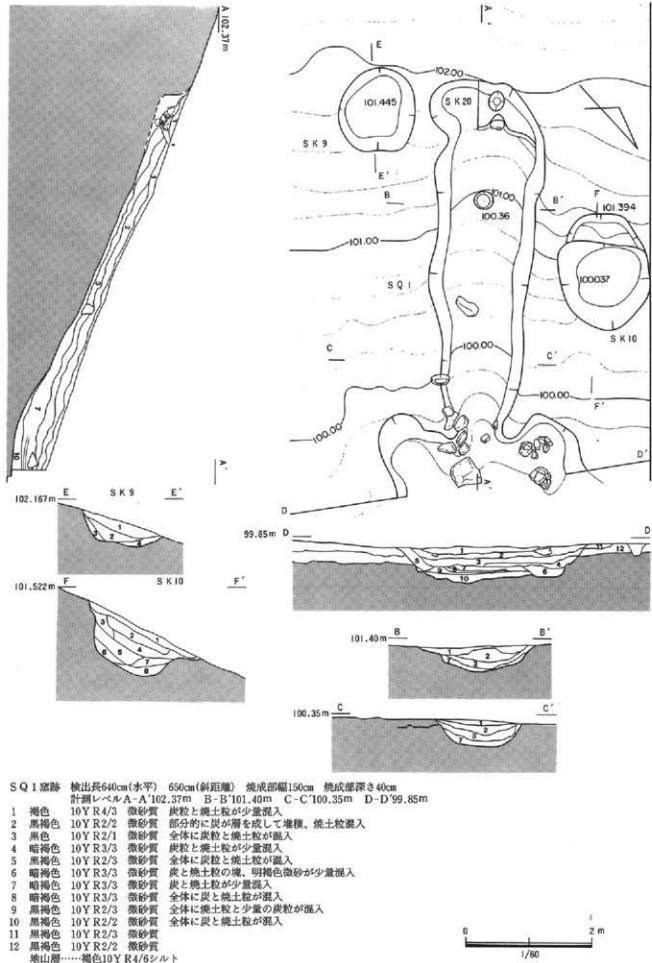
■縄紋時代 石器と縄紋土器が出土した。石器には磨石、凹石、石錐、磨製石斧、鍔状石器、石鎌、石錐がある(図版7)。時期は縄紋時代前期から中期のものが主である。

■弥生時代 弥生土器は工字状紋と三角紋が緻密な縄紋の上に施紋されている中期(第6図18)のものと、刺突紋ある後期(第6図8、天王山式)のものがある。

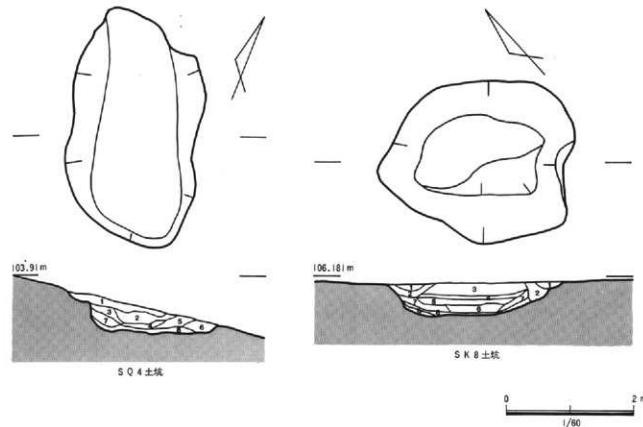
■平安時代 S-Q1窯跡の前庭部から、赤燒土器の壺と壺、黒色土器(内黒)の壺が破片で少量出土した。



第3図 A区遺構記載図



第4図 S Q 1 寶跡 SK 9・10・20土坑



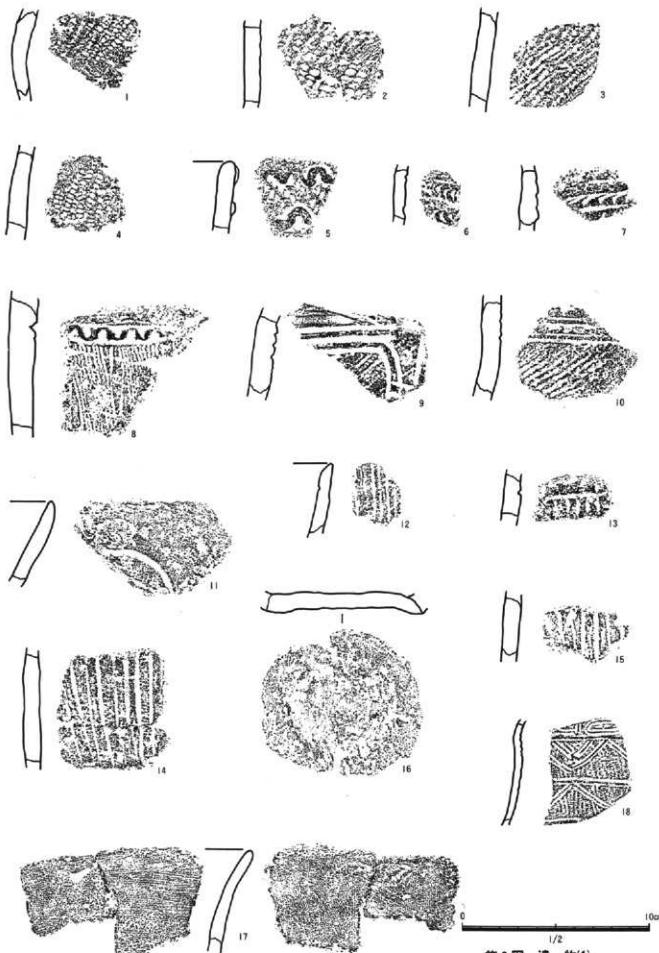
第5図 S Q 4・SK 8土坑

S Q 4 土坑 計測レベル103.91m

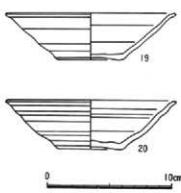
- 1 不整形 長径325cm 幅径200cm 深さ50cm
2 暗褐色 7.5Y R 2/3 微砂質 灰粒少量混入
3 に bei 黄褐色 10Y R 4/2 灰粒質 灰粒少量混入
4 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/4 微砂質
5 黑褐色 10Y R 3/1 微砂質 木炭粒が混入
6 黑褐色 10Y R 3/8 微砂質 木炭粒が混入
7 暗褐色 10Y R 6/2 微砂質 木炭粒が混入
8 に bei 黄褐色 10Y R 4/3 微砂質
9 青褐色 5 P B 2/1 木炭層
地山層……橙褐色10R 6/8シルト
- S K 8 土坑 計測レベル106.161m
- 1 不整形 長径280cm 幅径250cm 深さ50cm
2 暗褐色 7.5Y R 4/2 微砂質 灰粒少量混入
3 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/4 微砂質
4 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/3 微砂質
5 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/4 微砂質
6 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/4 微砂質 5層と7層の擾乱層
7 灰褐色 7.50Y R 4/2 微砂質 灰粒少量混入
8 に bei 黄褐色 7.5Y R 5/4 微砂質 灰粒少量混入
9 暗褐色 7.5Y R 4/2 微砂質 灰粒少量混入

S Q 9 土坑 計測レベル102.167m

- 1 暗褐色 10Y R 3/3 微砂質 灰粒微量混入
2 暗褐色 10Y R 4/4 微砂質
3 暗褐色 10Y R 4/6 シルト 灰粒が少量混入
4 に bei 黄褐色 10Y R 5/5 シルト 灰粒が少量混入
- S K 9 土坑 計測レベル101.577m
- 1 暗褐色 7.5Y R 3/3 微砂質 灰粒微量混入
2 暗褐色 7.5Y R 4/5 シルト 灰粒と灰粒が少量混入
3 暗褐色 7.5Y R 5/6 シルト 灰粒と灰粒が少量混入
4 暗褐色 10Y R 4/4 微砂質 灰粒と灰粒が多量混入
5 暗褐色 10Y R 4/4 微砂質 灰粒と灰粒が混入
6 に bei 黄褐色 10Y R 5/4 微砂質 灰粒と灰粒が少量混入
7 明褐色 10Y R 4/4 シルト 灰粒と灰粒が多量混入
8 暗褐色 10Y R 4/4 微砂質 灰粒と灰粒が少量混入
地山層……暗褐色7.5Y R 5/6シルト
- S K 20 土坑 計測レベル102.37m
- 1 に bei 黄褐色 10Y R 4/3 微砂質
2 海色 7.5Y R 4/3 微砂質
3 黑褐色 10Y R 3/2 微砂質
4 明褐色 7.5Y R 5/6 微砂質



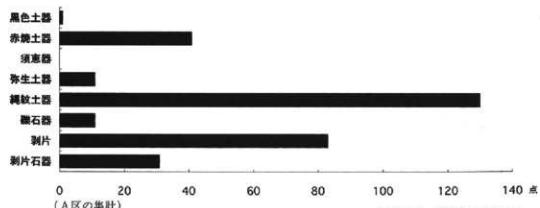
第6図 遺物(1)



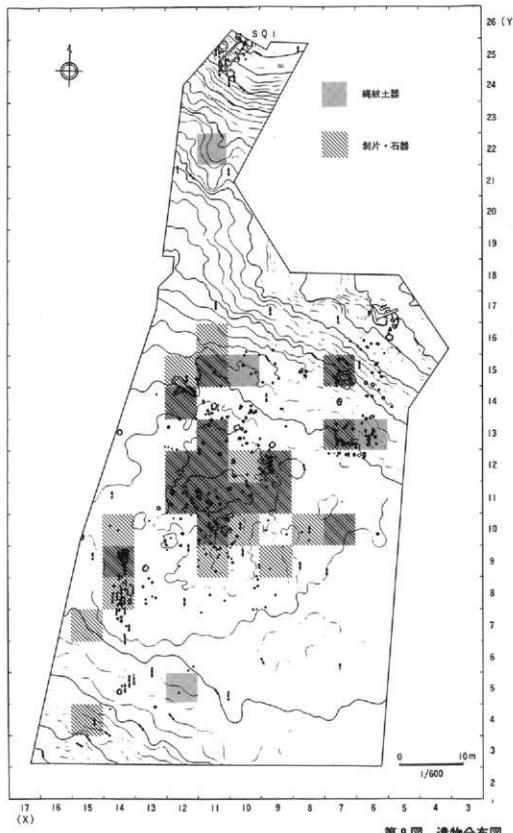
第7図 遺物(2)

表1 遺物集計表

地区	剝片	網石器	網石器	鉄石器	骨	木	生	骨器	赤土	焼	瓦	色
A区 6-13					9							
7-10				1		2						
7-13				1		2						
8-10				1								
8-19				1								
9-10	1											
9-11	5				4							
9-12	2	1			3							
10-10				1								
10-11				4		4		1				
10-12				3								
10-15					1							
11-9	1											
11-10	2					11						
11-11	9	1				4						
11-12	9					6						
11-13	5					1						
11-15	1					3						
11-16	1											
11-22						1						
12-5						1						
12-11	7					2						
12-12	1					2						
12-14						1						
12-15						2						
14-8						2						
14-10	1											
15-4	1	2										
15-7		1										
SQ-1											40	1
SX-2	1											
SP-5	1										1	
EL-6											4	
SK-8	3										2	
SK-10												1
SD-11	2										2	
SP-14	1											
SP-15											2	
SP-16	1											
SD-18	6	4	8	9								
SD-19	10	1	22									
XO	22	2	5	28	1							
B区21-9	1	2		9								1
22-9				4								
23-9		1		4								1
24-9		3		3								
計	32	89	11	150	11	1	42	1				



第8図 遺物集計グラフ



第4章 山槻4遺跡

1 概要

調査区は遺跡範囲の中央平坦部を中心に設定した5,000平方mである。標高は調査区中央の平坦部で104mである。北約250mに山槻5遺跡がある。埋設遺構1基、焼壁土坑2基、溝状遺構、柱穴跡等が検出された。調査区中央では奈良平安時代の土器類および弥生土器などが整理箱で4箱出土した。なお弥生時代の所産と特定できる遺構は判らない。

2 遺構

■ SK 1土坑(第11図) 土器を埋設した遺構である。径50cm深さ30cmの穴の底に偏平な礫を敷き、その中の焼成行為の後、赤焼土器の平底の妻(12図14)を埋めたものです。埋め土には炭が多く混入している。似た例は佐佐町の下長瀬遺跡^{※1}にあります。ここでは赤焼土器壺の中に环と小皿と石を入れ、これを埋納した遺構が基盤出されています。地鎮祭時の遺構と考えられています。本遺跡の場合壺の中に土器や石等は見られないこともあります、下長瀬遺跡の例とすぐには同一視はできない。埋設されていた赤焼土器壺から奈良・平安時代の所産と考えられる。

■ SK 2土坑(第11図) 円形に掘られた土坑で壁及び底が赤く焼け、焼土化している。焼壁土坑といわれるものです。径80cm深さ30cmを測ります。土器等の遺物の出土はありません。埋め土には炭粒や焼土粒が混入している。赤焼土器を焼成した“穴窯”ではないかと考えられています。^{※2}平安時代の所産と考えられます。

■ SQ 5土坑(第11図) SQ 2土坑とおなじ焼壁土坑です。壁及び底が赤く焼け、焼土化している。径1.2m、深さ40cmを測ります。SQ 2より径も深さも一回り大きなものです。埋め土にはSQ 2より多量に炭粒や焼土粒が混入している。これも土器等の遺物の出土はない。平安時代の所産と考えられる。

■ 柱穴群(第10図) 調査区中央の平坦部に集中して検出された。柱列状に並ぶようなものもあるが、建物を構成するような配置では検出されていない。時期も不明である。

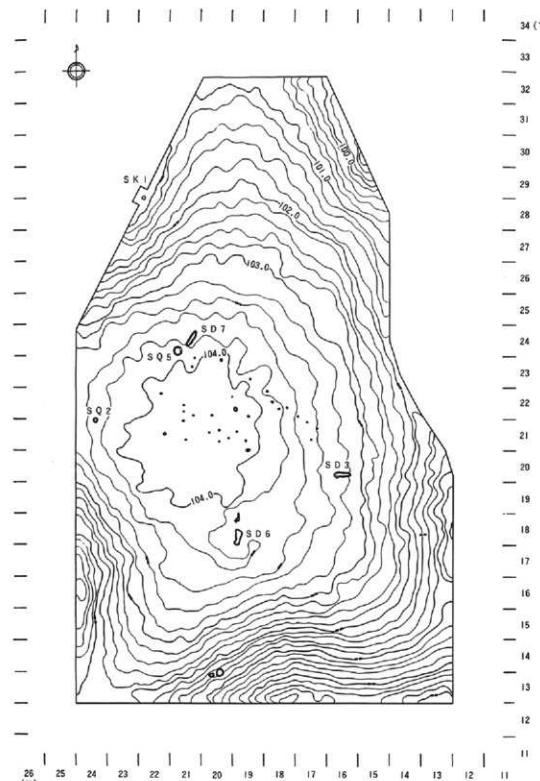
3 遺物

繩紋土器、弥生土器、剥片、須恵器、赤焼土器がある。繩紋土器と弥生土器はすべて碎片のため全体の形が判るものはない。繩紋土器は粘土紐の添付などから中期の所産と考えられる。弥生土器には変形工字紋と工字状紋が、緻密な繩紋の上に施紋されているものがある。土器の時期は弥生時代前期と中期のものである。奈良平安時代の須恵器には蓋、环、高台环、壺、甕がある。环の底部はいわゆるヘラ切り離しによるものです。赤焼土器には环、甕、鍋などがある。黒色土器は内面を炭素吸着した高台环がある。

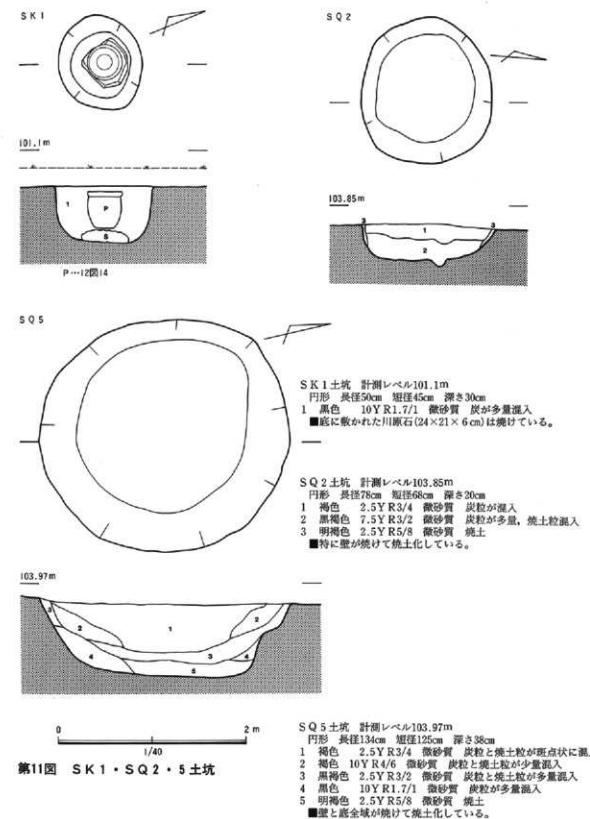
※1 「山道遺跡(第2) 磨崎跡 下長瀬遺跡発掘調査報告書」、頁145頁、山形県教育委員会、1989年。

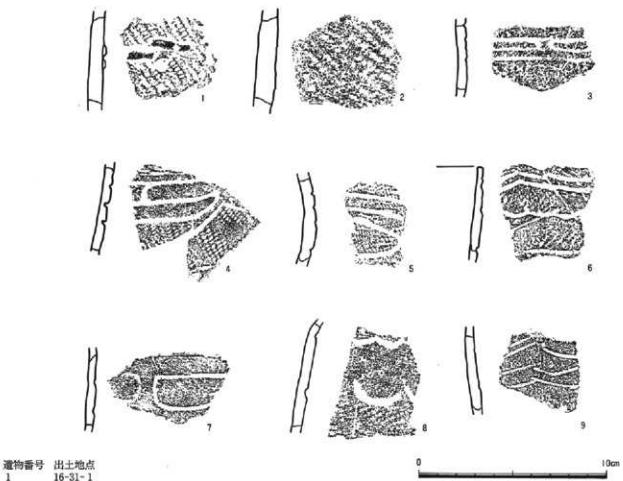
※2 「山谷田遺跡 山海協同群 発掘調査報告書」、頁170頁、山形県教育委員会、1991年。

S Q 9・14・16 を窓壁や赤焼土器等の出土状況などから“赤焼土器生産遺構”としている。PP. 61, 119.



0
10m
1/600





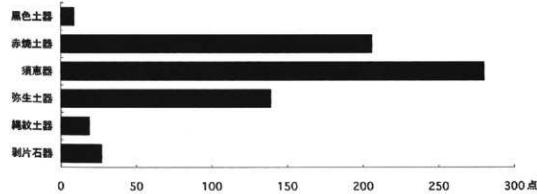
遺物番号 出土地点
 1 16-31-1
 2 23-17
 3~5 18-20
 6 19-22
 7 19-23
 8 19-18
 9 18-15
 10 17-20
 11 20-21
 12 18-15
 13 17-20
 14 SK-1
 15 18-25

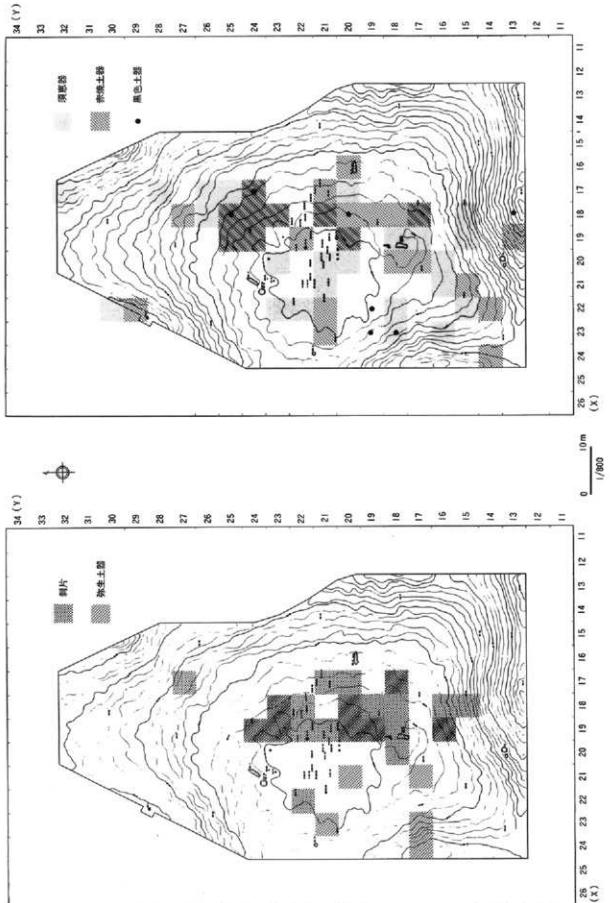
第12図 遺 物

表2 遺物集計表

地区	銅石	片岩	鰐骨	文鏡	赤土	生土	須恵器	赤土	焼成土	色土
16-20		1					1			
16-31		1								
17-18	1		1							
17-20		3	15							
17-21		3			2					
17-24				11	4	1				
17-25				7						
17-26				1						
17-27				4						
17-28				1						
17-32				1						
18-13							1			
18-15		1	1							
18-16		3								
18-17				1	1					
18-18		5		30						
18-19		3		2						
18-20	7		21		2	1				
18-21				2	3					
18-22			2							
18-23	1	5	13	3						
18-24			46	38						
18-25			12	16	1					
18-26			1							
18-27				3						
19-13				2						
19-15				1						
19-16	1		2							
19-17				6						
19-18				17	1					
19-19	2			8						
19-20	5		33	3	2					
19-21			1							
19-22			7		3					

地区	銅石	片岩	鰐骨	文鏡	赤土	生土	須恵器	赤土	焼成土	色土
19-23		1		14						
19-24	1				1	45	35			
19-25					12	42				
20-16							1			
20-17							3			
20-18							2	1		
20-20								1		
20-21								18		
20-23								2		
21-15									1	
21-16								5		
21-17	1									
21-20		1						20		
21-21										
22-14								1		
22-15								1		
22-18								6		
22-19										3
22-21									1	
22-22								1	6	
22-23								3		
22-30								1		
23-16								1		
23-17	2	12								
23-18								1		1
23-19										1
23-21	1									1
24-14										1
24-16								1		
24-17		2								
24-20							5			
SK-1										1
SD-6							1			
XO	1			1	34	7				
計	27	19	139	260	206	9				





第5章 山櫛5遺跡

1 概要

調査区の東、西側に向く斜面で竪窯1基と土坑1基を検出した。調査面積は200平方mである。表面から人力により掘り下げをおこなったこともあり、非常に良好な状態で検出できた。調査区西側の谷間は粘土層となっている。

調査区の南側には近年の所産と考えられる炭焼窯がある。遺跡の北側を下った畑地では須恵器などが散布している。本遺跡にかかる工人集団の集落跡の存在が考えられるのではないか。なおこの周辺では近年瓦業者による粘土採掘が大々的におこなわれたという。

2 遺構

■ SQ 1 竪窯 半地下式の竪窯である。以下に計測値をまとめると。中軸線の方位角度はS-43°30' E。煙道から焚き口までの斜距8.8m、水平距離8m。焚き口～煙道部の比高3.6m。焚き口の幅1m。燃焼室の最大幅1.2m。焼成室の最大幅1.5m。焚き口推定高0.7m。焼成室の推定最高1.4m。煙道部の幅0.7m。焚き口の傾斜角8度。燃焼室の傾斜角20度(燃焼部寄り)～30度(煙道部寄り)。煙道部の傾斜角45度。壁の補修回数は5回認められる。焼成部の底には粗い砂が荷かれている。

架構されていた天井は窯体内の埋め土の上層5～7層に崩落していた。特にB-B' & C-C' の上層断面で確認された。煙道及び燃焼部と焚き口の外側は赤く焼け硬い焼土となっている。焚き口部は礫を扁平に割った石で組まれている。天井の石は落ちていた。焼成部の側壁や天井部の貼面には、粘土を素手で張り付いた痕、指の擦れ痕が見られる。

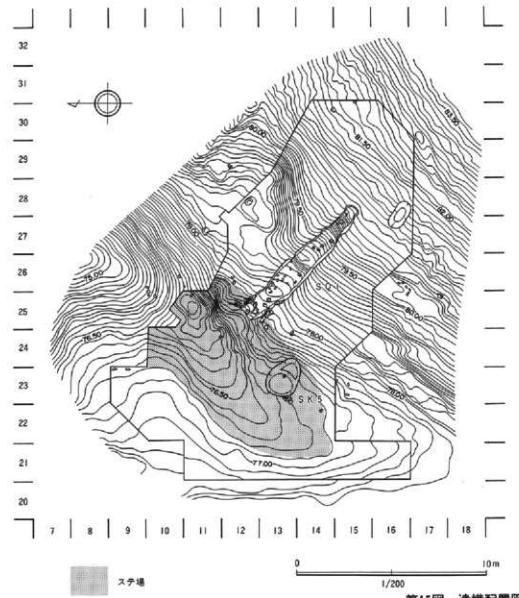
須恵器と赤焼土器がS Q 1 窯内から理箱で40箱、ステ場から160箱出土した。合計200箱の出土である。大多数が須恵器である。うちステ場の遺物は重量にして1.359tある。ステ場の土器は窯地状になっている部分で出土量が多い(第15・26図、表4)。なおステ場からは長胴甕、平底甕、鍋が須恵器質となってしまった、赤焼土器の失敗作が出土している。須恵器で白っぽくなつた不良焼成のものは少量である。

焼成部からは須恵器の大形甕の破片や、重ね焼きの状態であった蓋、环などが出土している(第17図3、4、7～11、第18図15～18、第20図25)。また赤焼土器の甕が窯体内に残っていた(第21図26、27)。焼成部(C D, E F区)で环と甕の破片数が多い。环が57%ともっとも多く甕が次いで22%ある(第25図)。环は焼成部の全域にかけて配置されている。甕と壺はどちらかといふと燃焼部に近く配置されて焼成されたようである(第24図)。

■ SK 5 土坑 平面は梢円形で径1.6、深さ0.6m。谷側が円形に深く掘られている。特に赤焼土器の甕と鍋が多く廃棄されていた。須恵器の甕(第19図23)と同様な規格でつくられた甕がもう1個体出土している。窯構築跡の粘土採掘穴とも考えられる。

3 遺物

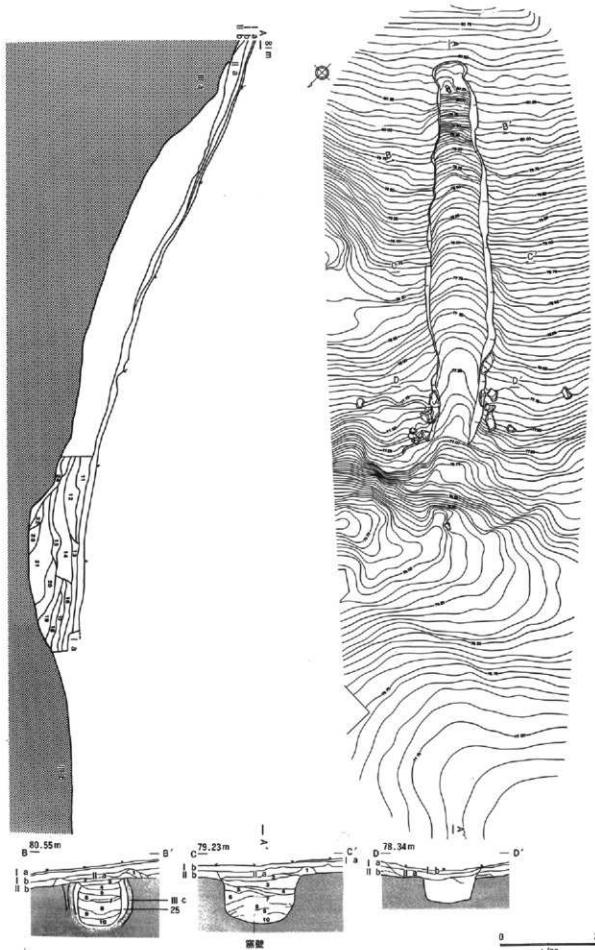
須恵器の器種には蓋、环、高台环、双耳环、短頸甕、长頸甕、横瓶、甕、研がある。赤焼土器には丸底の長胴甕、平底の甕(底部回転糸切り)、鍋がある。他に酸化焰焼成の鋳錠



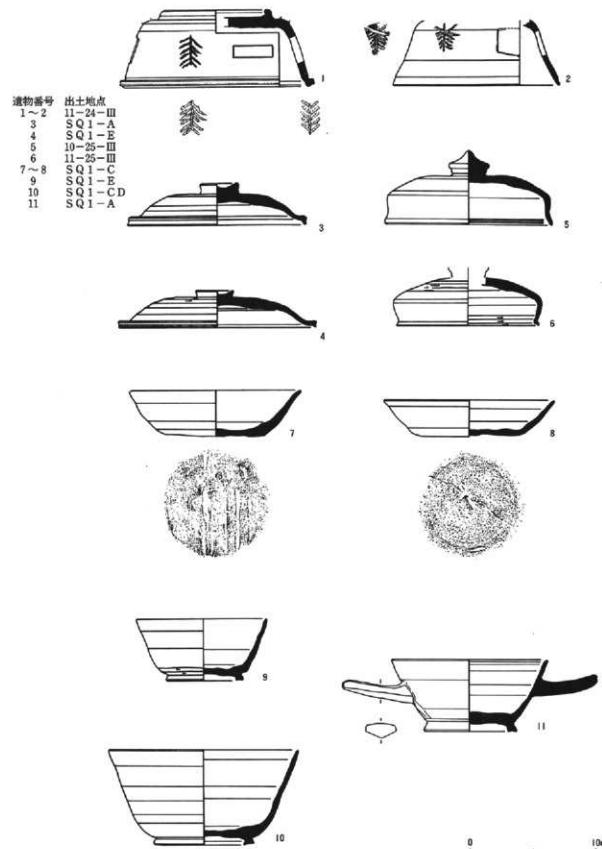
第15図 造構配置図

SQ I 遺跡
 I a 單褐色 7.5Y R 3/3 微砂質
 I b 褐色 7.5Y R 4/3 微砂質 粗粒多い
 II a 單褐色 7.5Y R 3/3 微砂質 砂粒と粘土粒が少量混入
 II b 褐色 7.5Y R 4/3 微砂質 砂粒が少量混入
 III a 黄褐色 2.5Y R 5/3 微砂質 粘性の強いローム土
 III b 黄褐色 2.5Y R 4/4 粘土 烧土
 III c 赤色 10R 4/8 微砂質 烧土

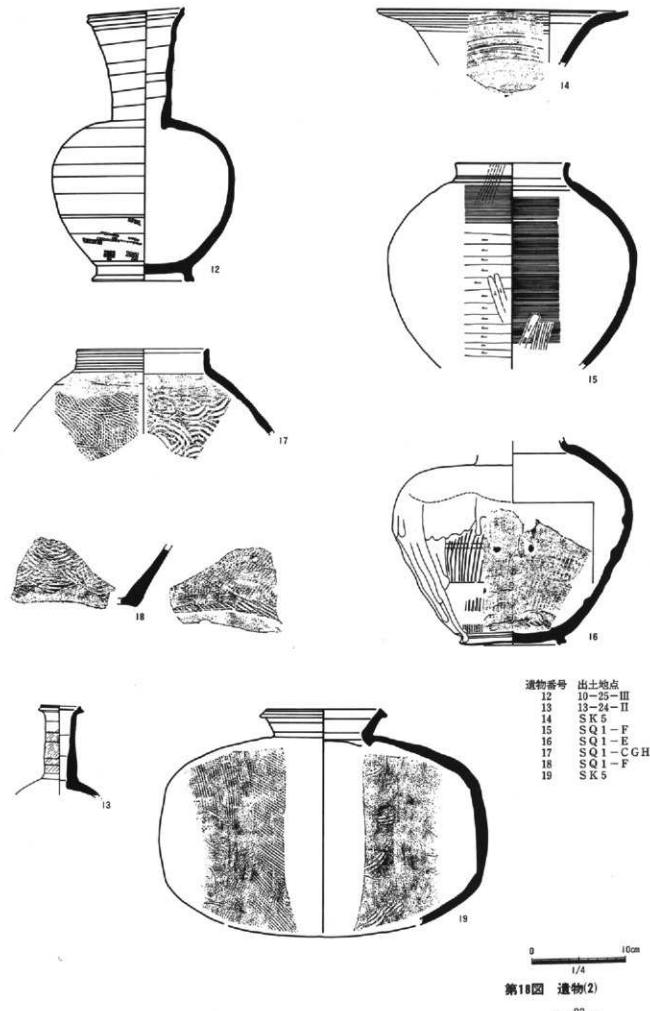
- 1 單褐色 7.5Y R 4/3 微砂質 上層が焼土化 (明褐色2.5Y R 5/6)、粗粒が混入
- 2 單褐色 7.5Y R 4/3 粘土 烧土 (明褐色2.5Y R 5/6) が斑状に混入
- 3 上層 單褐色 5 Y R 4/4 微砂質
- 4 單褐色 5 Y R 4/6 微砂質
- 5 暗オーリーブ色 5 Y R 5/2 微砂質 下層は暗緑灰10G Y 4/1、崩落した窓壁
- 6 明緑褐色 5 Y R 5/8 微砂質
- 7 暗オーリーブ色 5 Y R 5/2 微砂質 下層は暗緑灰10G Y 4/1、崩落した窓壁
- 8 單褐色 5 Y R 4/6 微砂質
- 9 明緑褐色 5 Y R 5/8 微砂質
- 10 單褐色 2.5Y R 4/8 微砂質 下層は粗砂が散かれている
- 11 單褐色 7.5Y R 1.7/1 微砂質 灰と粗粒が混入
- 12 單褐色 5 Y R 5/3 微砂質 灰と粗粒が混入
- 13 單褐色 5 Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が混入
- 14 黒色 10Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が少量混入
- 15 黒色 10Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が少量混入
- 16 黒色 10Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が粗粒が混入
- 17 黒色 10Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が混入
- 18 黒色 10Y R 2/1 微砂質 灰と粗粒が混入
- 19 にじみ赤褐色 5 Y R 5/6 微砂質 多量の焼土粒とII a 層壁が混入
- 20 赤色 7.5Y R 5/6 微砂質 多量の焼土粒と灰が混入
- 21 赤褐色 10Y R 1.7/1 微砂質 灰塊に焼土粒が混入
- 22 褐色 2.5Y R 6/6 微砂質 多量の焼土粒と灰 (窓壁)
- 23 褐色 2.5Y R 6/6 微砂質 多量の焼土粒と灰 (窓壁)
- 24 淡褐色 2.5Y S 4/4 粘土
- 25 暗緑灰色 10G Y 4/1 微砂質 窓壁、硬質、幅16cmで5回の上塗り確認



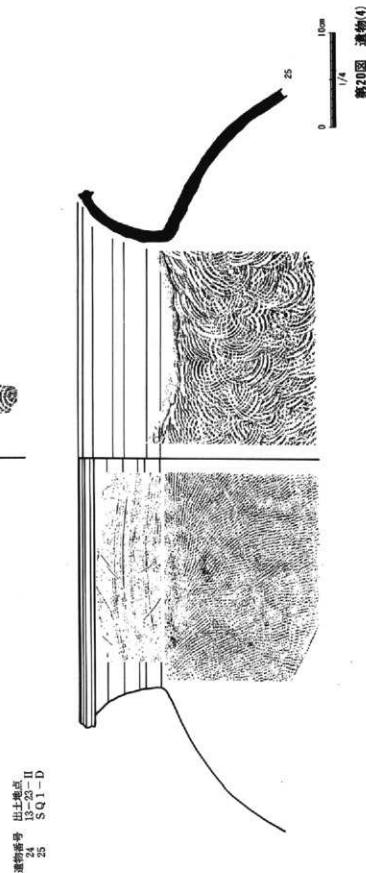
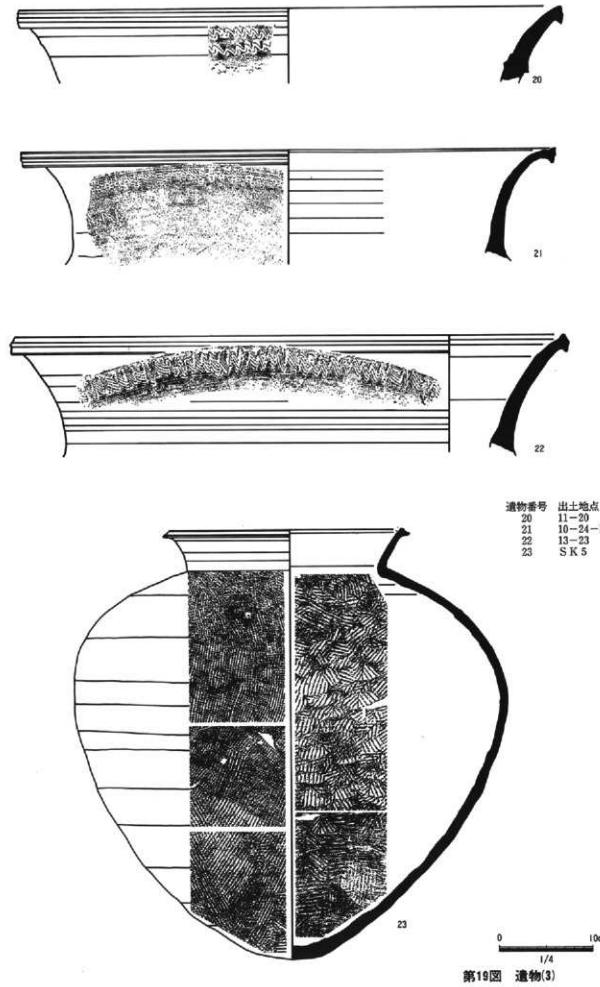
第18図 SQ I 遺跡

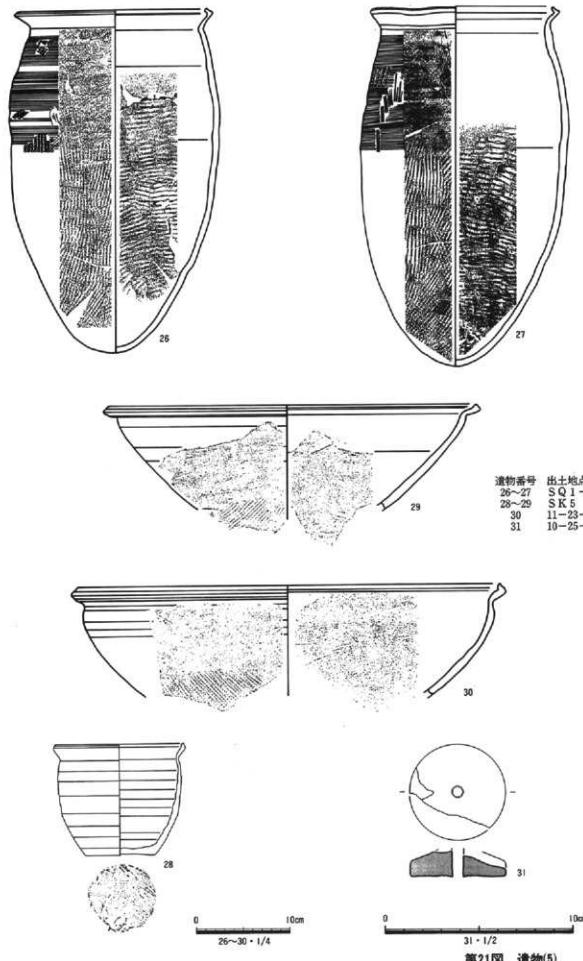


第17図 遺物(1)

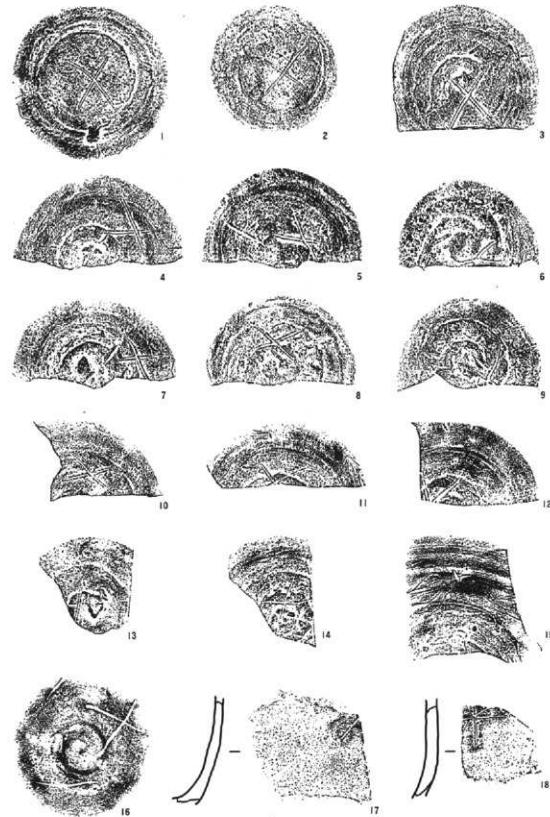


第18図 遺物(2)



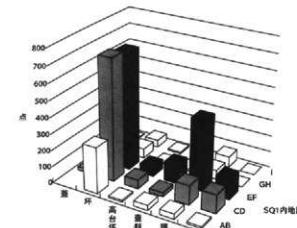
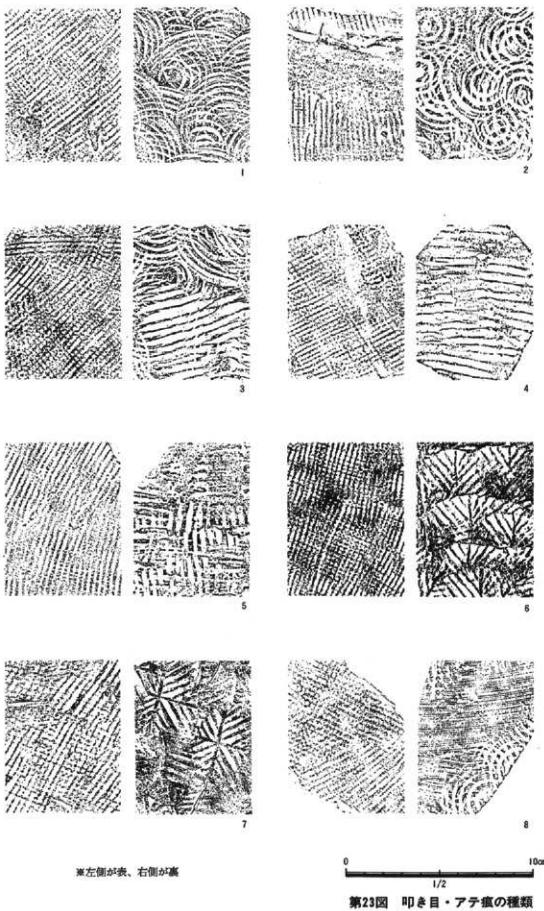


第21図 遺物(5)

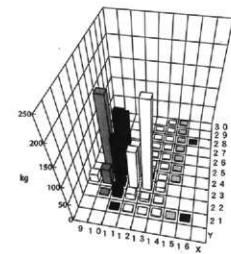


1~14 植物模印部
15のみ体部
16~18 赤帯土器全体部

第22図 ヘラ描き土器



第24図 SQ 1 内遺物点数グラフ



*第24・25図のR標は赤焼土器の標である。他はすべて灰瓦器である。

第25図 SQ 1 内遺物器種別割合グラフ

地区	須恵器					赤焼土器 壺
	蓋	瓶	高台	壺	袋	
AB	0	281	10	31	32	10
CD	22	734	54	25	118	112
EF	68	712	59	117	429	126
GH	3	58	4	12	56	0
I	5	45	8	7	68	0
計(点)	98	1830	135	192	703	249

■地区的A～Fは焼成部、G～Iは燃焼部である。

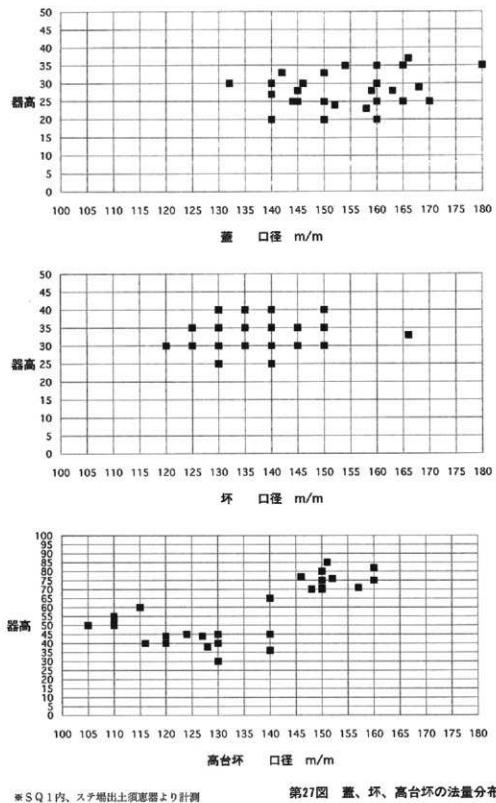
第25図 SQ 1 内遺物点数表

1個体も破片も1点とカウントとした。

G番号	X軸							
	9	10	11	12	13	14	15	16
30						0.4	3.2	
29					0.9	0.5	0.3	
28			6.6	0.9	0.9	1.5	0.1	
27			3.7	1.5	2.2	2.0		
26		27.1	24.0	4.1	1.8	1.3		
25		134.2	59.9	6.4	3.2	1.8		
24	198.2	162.7	89.3	16.0	0.5	2.1		
23	22.2	43.2	129.6	103.9	221.3	13.8		
22		1.6	27.7	17.7	8.7	3.4		
21			1.5	2.0	0.7	3.4	1.0	0.4

単位: kg
(総重量 1.359t)

第26図 SQ 1 ステ場遺物重量分布表



第27図 蓋、壺、高台壺の法量分布図

車標のものが2点ある(第21図31)。

須恵器の壺、高台壺、双耳壺の底部はいわゆるヘラ切り離しによるものである。双耳壺は第17図11の他耳部だけのものが1点ある。図示できなかったが蓋でつまみがないものが2点ほどある。蓋・壺・高台壺の法量分布を第27図に示した。壺は口径130~140mmで器高30~35mmのものに数量的分布域が集中している。須恵器の短頸壺17は体部の内外に叩き・アテ痕がある。底部は叩きや底径の大きさなどから18の様な形態でないかと考えられる。赤焼土器の壺で図示し得なかったが上部に跳ね上がる取っ手が付くものがある。

硯は円脚円面硯が2点ある(第17図1・2)。1の脚部には横長の窓と方形の窓が向かい合って二対いている。この間に樹木状の絹線紋^{※1}が天地を越えて描かれている。

ヘラ記号は須恵器壺の底部にかかれた「×」が多い(第22図)。内17・18は赤焼土器の平底甕の体部に小さく「×」が描画されている。しかし図示できなかったが同様な甕の体部半面に大きく描かれたものもある。

S Q 1 窟跡の時期は焼成された須恵器の形態的特徴から、8世紀中葉～末の所産としておきたい。

第6章 調査のまとめ

1 山桜3遺跡

調査区中央の平坦部では繩文時代の住居跡と考えられる柱穴と地床炉が検出された。繩文土器と剝片もこの周辺から出土した。繩文時代の住居跡は地焼戸の検出状況から見るに、3~5軒ほどと考えられる。住居の数や配置状況、他の遺構が検出されないとなどから、短期間に営まれた居住地と考えられる。また縁辺の斜面では平安時代の窓跡と土坑が検出された。平安時代の遺物はS Q 1 窟跡だけの出土である。

2 山桜4遺跡

埋設遺構1基、焼壁土坑2基、柱穴跡等が検出された。調査区中央の平坦部では平安時代の須恵器、赤焼土器、黒色土器が検出され、さらに弥生土器などこの周辺から出土した。弥生時代と奈良・平安時代の短期間に営まれた居住地と考えられる。

3 山桜5遺跡

小規模な谷間で須恵器と赤焼土器を焼成した登窯が1基検出された。窓跡は非常に良好な状態で検出された。窓体内とステ場からは土器が200箱出土した。S Q 1 窟跡の時期は焼成された須恵器から、8世紀中葉～末の所産としておきたい。

* 1 円脚円面硯の樹木状の紋様は、宮城県宮崎町東山遺跡(加美郡)、山形県米沢市荒原遺跡などで出土している奈良時代後半から平安時代前半にかけての硯に見られる。

報告書抄録

ふりがな	やまとこころひのきのむら
書名	山楯3・4・5遺跡発掘調査報告書
翻書名	国営農地開発事業鳥海南麓地区(4)
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	安部 寛長南憲一
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 Tel 0236-72-5301
発行月日	西暦 1994年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山楯 3	山形県鶴岡市平田町大学 山楯	6464	平成2年度 登録	38度 54分 15秒	139度 57分 15秒	19930511～ 19930728	4,373	国営農地 開発事業鳥 海南麓地区
山楯 4	同上	同上	同上	38度 54分 25秒	139度 57分 25秒	19930705～ 19931014	5,000	同上
山楯 5	同上	同上	同上	38度 54分 30秒	139度 57分 32秒	19931025～ 19931130	200	同上

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
山楯 3	集落跡 窯	縄紋中期 弥生前期 平安	住居跡 地床炉 土坑 登窯 土坑	1 4基 1基 1基 4基	縄紋土器 竈状石器 石器 石匙 弥生土器 赤燒土器	地調査前に誤って表土 が取られ遺物の大半が 失われた。
山楯 4	集落跡	縄紋 弥生 奈良 平安	梗壁土坑 埋設遺構	2基 1基	竈状石器 弥生土器 須恵器 赤燒土器 黑色土器	埋設遺構は、地鎮祭肥 に関する遺構と考え られる。
山楯 5	窯	奈良	登窯 土坑	1基 1基	須恵器：蓋、壺、高台壺、 坪、甕、横瓶甕 赤燒土器：鍋、甕	壺底部の切り離しは、 全てヘラ切りによる。

図 版



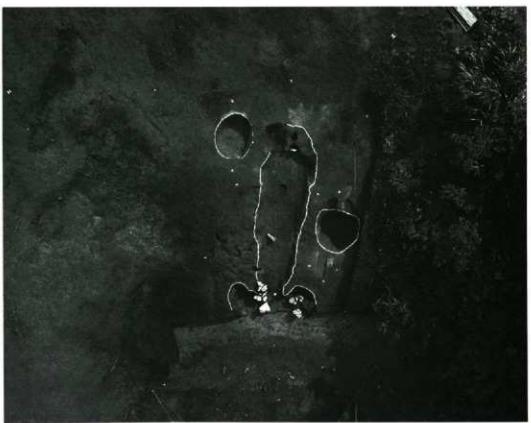
山柄 3 遺跡（空中から、手前が南）

山橋 3 遺跡

図版 2



S T12住居跡 SK 8土坑（空中から、手前が東）



S Q 1 窯跡（空中から、手前が北）

山橋 3 遺跡

図版 3



B区調査状況（東から）



B区精査後状況（西から）



S Q 4 土坑（南から）



S K 8 土坑（南から）



S Q 4周辺調査状況（北東から）



S K 9 土坑（東から）



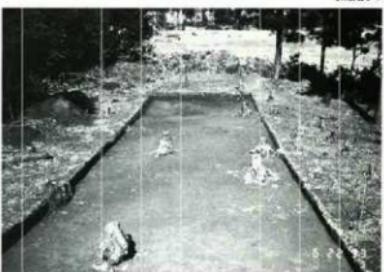
S T12住居跡（西から）



S K 10 土坑（東から）



B 区調査状況（東から）



B 区精査後状況（西から）



SQ 4 土坑（南から）



SK 8 土坑（南から）



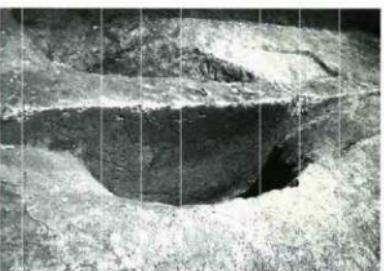
SQ 4 周辺調査状況（北東から）



ST 12住居跡（西から）



SK 9 土坑（東から）



SK 10 土坑（東から）

図版 4 山柄 3 遺跡



S Q 1 煙跡炭検出状況（北東から）



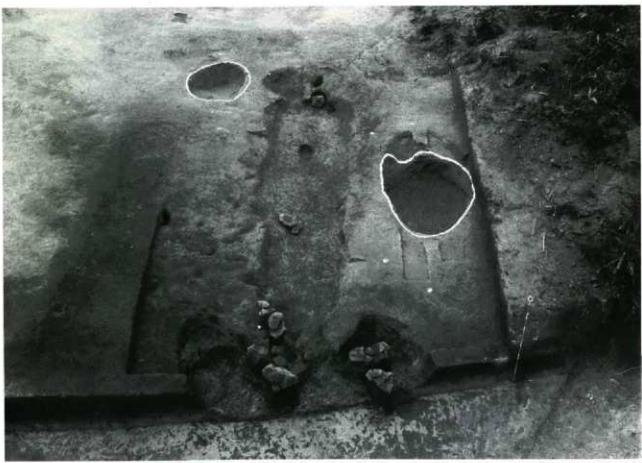
S Q 1 煙跡炭検出状況（東から）



S Q 1 煙道部（北から）

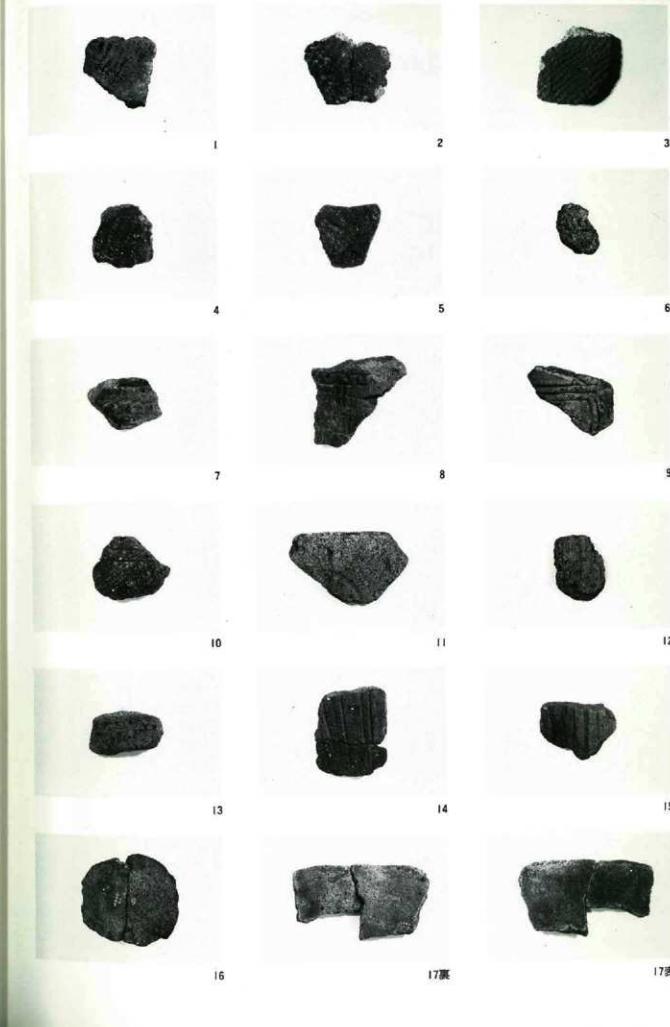


S Q 1 煙道部（東から）



S Q 1 完掘状況（北から）

図版 5 山柄 3 遺跡

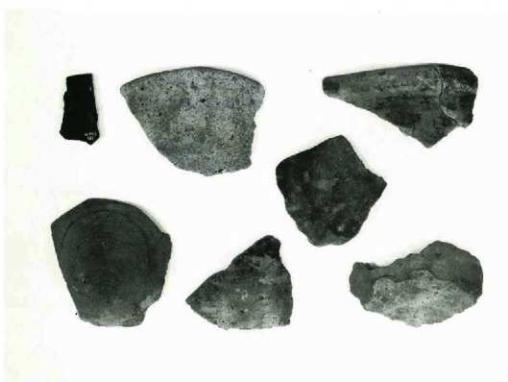


16

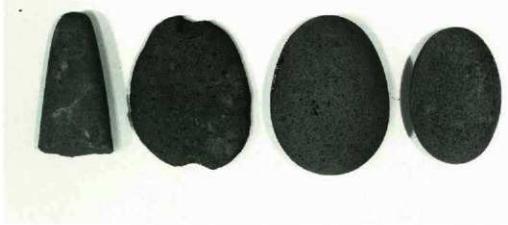
17裏

17表

図版 6 山樋 3 遺跡



黒色土器・赤焼土器

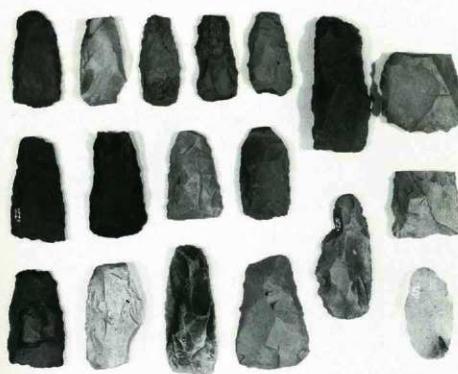


磨製石斧、石錘、磨石

図版 7



石鏃、石錐、石匙



ヘラ状石器

山橋 4 遺跡

図版 8



遺跡俯瞰（北東から）



遺跡近景（南西から）

山橋 4 遺跡

図版 9



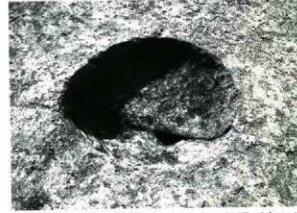
S K 1 埋設遺構（東から）



S K 1 底面石（東から）



S Q 2 土坑土層（東から）



S Q 2 完掘状況（東から）



S Q 5 土坑土層（東から）



S Q 5 烧壁部土層（東から）



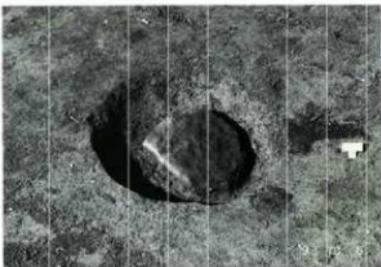
S Q 5 完掘状況（南東から）



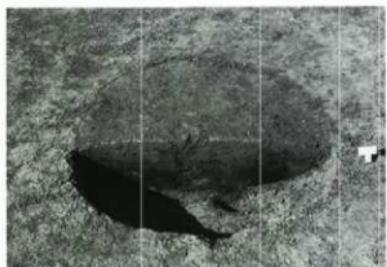
調査状況（南西から）



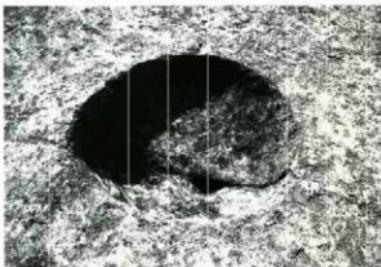
SK 1 埋設構造 (東から)



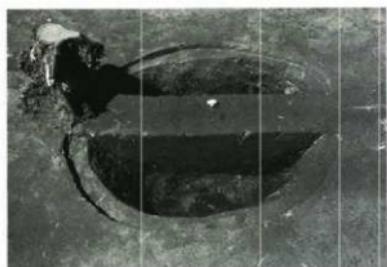
SK 1 底面石 (東から)



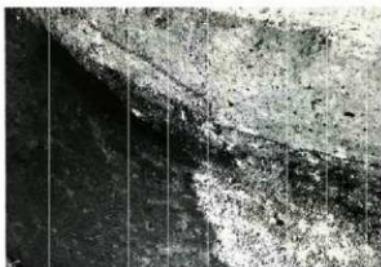
SQ 2 土坑土層 (東から)



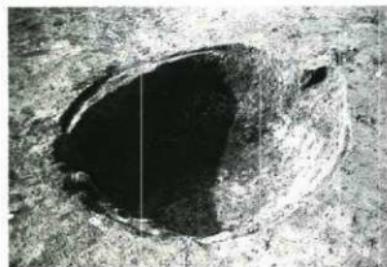
SQ 2 完掘状況 (東から)



SQ 5 土坑土層 (東から)



SQ 5 焼壁部土層 (東から)



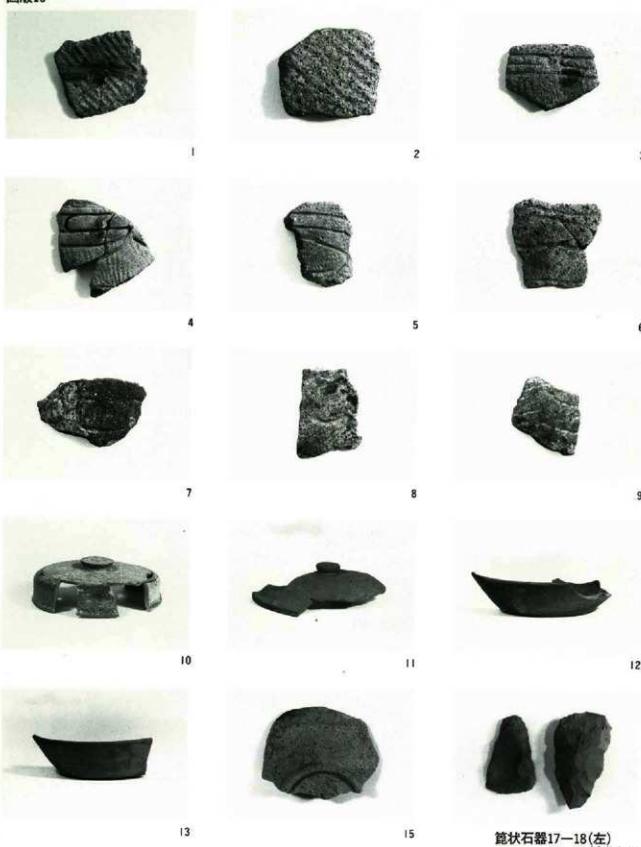
SQ 5 完掘状況 (南東から)



調査状況 (南西から)

山橋 4 遺跡

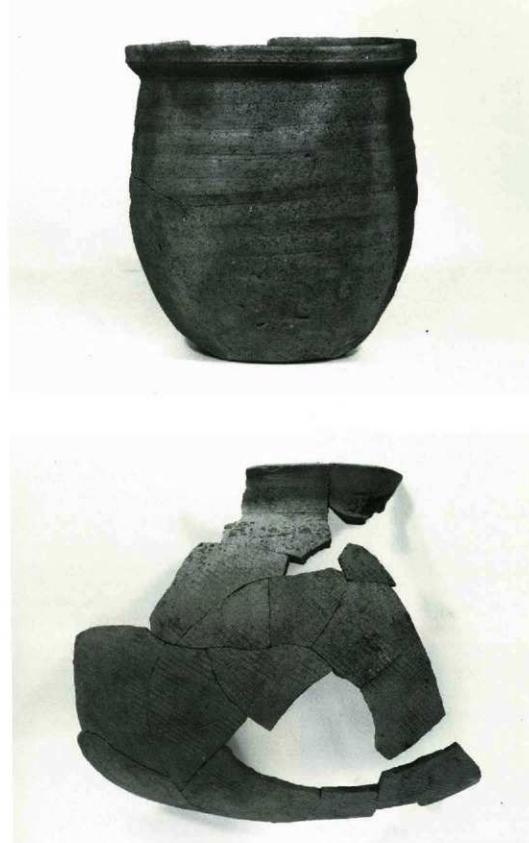
図版10 山橋 4 遺跡



籠状石器17—18(左)
21—17(右)出土

図版11

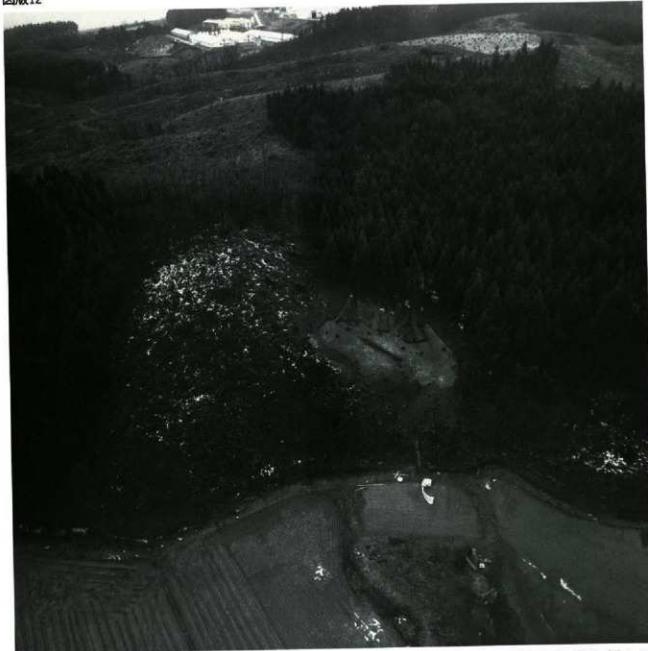
山橋 4 遺跡



須恵器横瓶 17~19—23・24G出土

山柄 5 遺跡

図版12



山柄 5 遺跡俯瞰（北から）



調査区近景（北から）



S Q 1 窯跡検出状況（北西から）

山柄 5 遺跡
図版13



S Q 2 炭窯跡（北東から）



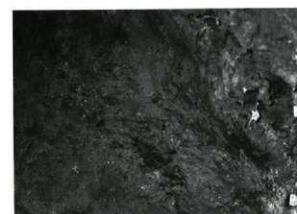
調査状況（西から）



S Q 1 検出状況（西から）



S Q 1 煙道部断ち割り状況（北西から）



S Q 1 窯壁側面（北から）



S Q 1 B-B' 土層堆積状況（北西から）

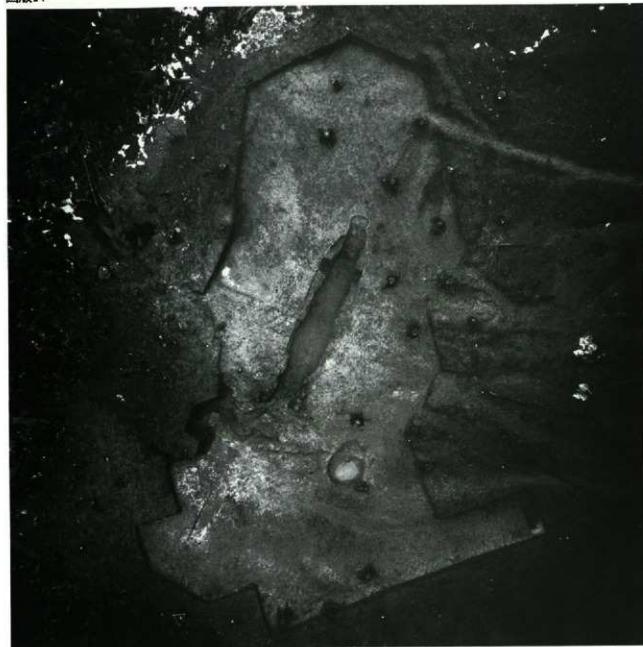


SK 5 土坑遺物出土状況（南から）



S Q 1 C-C' 土層堆積状況（北西から）

図版14



調査区全景（手前西）



S Q 1 窯跡（北西から）



S Q 1 窯体内遺物出土状況（北西から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

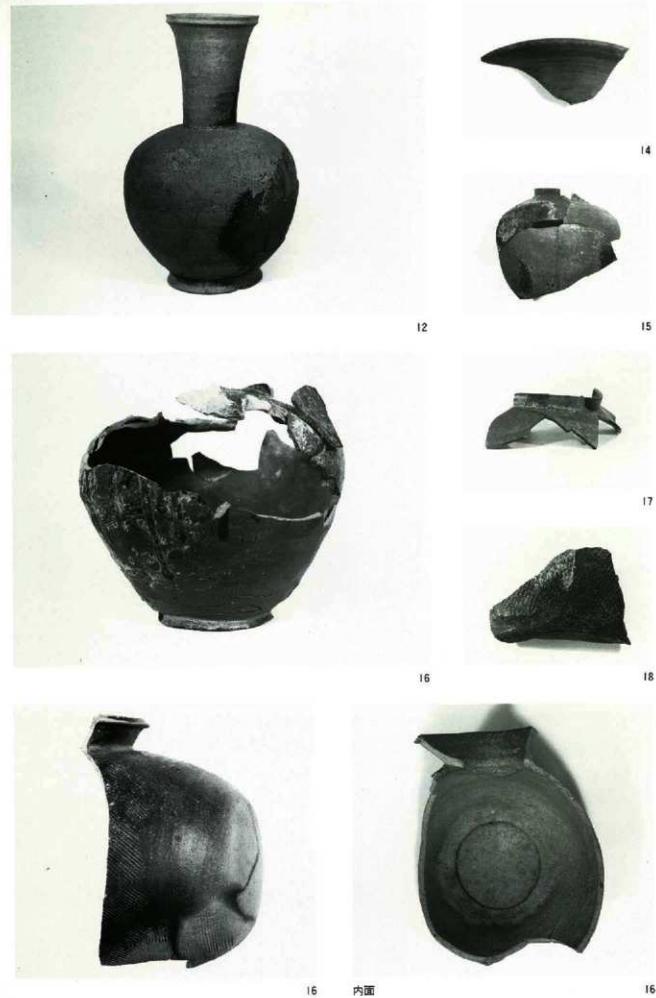


14



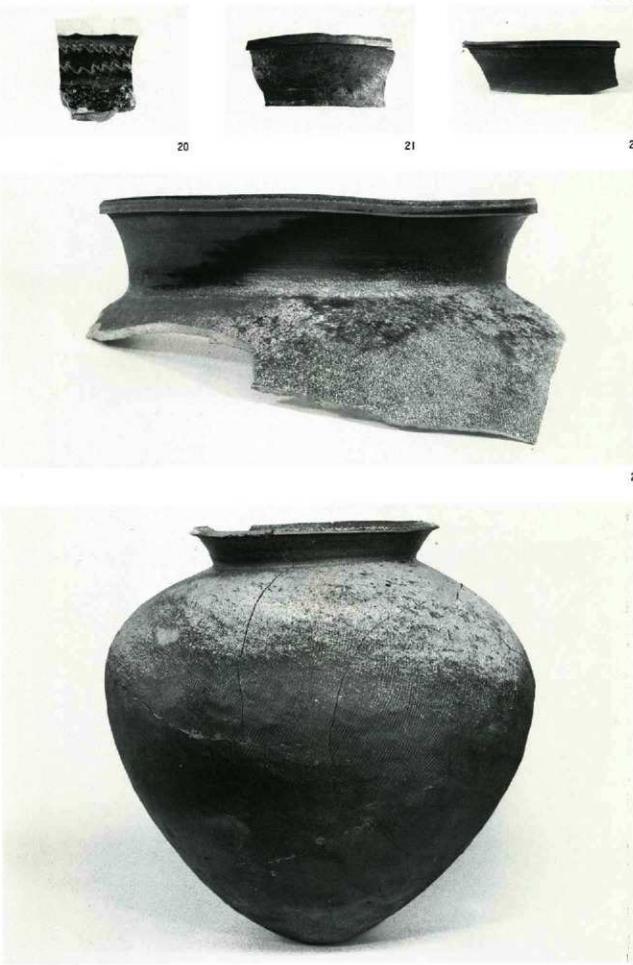
15

山柄 5 遺跡
図版16

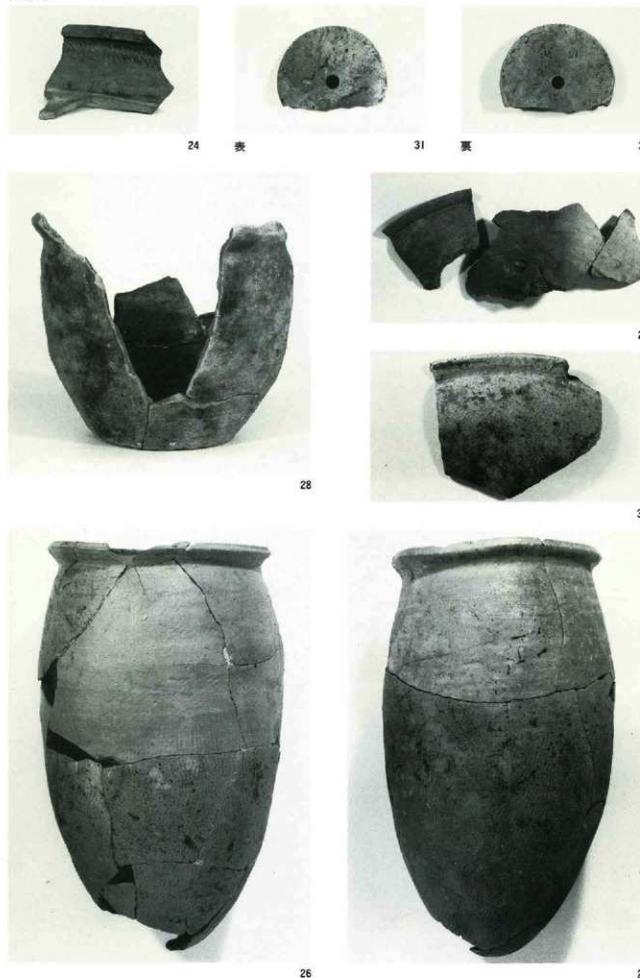


内面
16

山柄 5 遺跡
図版17



23



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第4集

山楯 3・4・5 遺跡発掘調査報告書
国営農地開発事業鳥海南麓地区(4)

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 大場印刷株式会社